

2026 年 01 月 09 日

沖縄と本土における平和意識の地域差

ーインタビュー調査による比較分析ー

榊 晋太郎

目次

- 第 1 章 序論
- 第 2 章 沖縄戦について
 - 2.1 沖縄戦の特異性
 - 2.2 戦後の復興
- 第 3 章 調査内容
 - 3.1 調査対象
 - 3.2 調査方法
 - 3.3 質問項目
- 第 4 章 結果
 - 4.1 平和概念の捉え方
 - 4.2 子供時代の平和学習と教育経験
 - 4.3 日常生活における平和意識の契機
 - 4.4 出身地域と平和意識の関係
 - 4.5 次世代の平和教育への提案
 - 4.6 追加質問から見える地域固有の特徴
- 第 5 章 考察とこれからの展望
 - 5.1 本研究から得られた主な知見
 - 5.2 平和意識の地域差を生み出す要因
 - 5.3 移動経験がもたらす平和意識の変容
 - 5.4 平和教育への示唆と今後の課題

第 1 章 序論

私が本研究を進めようと考えたきっかけは、大学時代に経験したことにある。沖縄に帰省した際に、本土出身の友人とともにひめゆりの塔を訪れる機会があった。同じ空間で同じ展示を見学していたにもかかわらず、私と友人とのあいだに平和に対する捉え方や熱量の大きさに違いがあることを強く意識することとなった。私にとって沖縄戦は、地域社会や家庭で日常的に語られてきた身近な記憶であり、慰霊の日や学校教育を通し

て繰り返し向き合ってきた体験がある。一方、友人は学校教育を通じて沖縄戦に関する知識を持っていたものの、直接的に語り継がれる経験や地域社会に根ざした記憶の継承に触れる機会は乏しく、沖縄戦を「遠い歴史」として理解する姿勢がうかがえた。このような体験の違いを目の当たりにしたことで、平和意識に地域差が存在するのではないかという関心を抱くに至った。

ここでまず、平和意識の定義を示したい。松本康は平和意識の定義として次のように述べている。

本研究では、個々の人間の持つ平和に関する諸意識を総括して、「平和意識」と呼ぶことにする。(2)

本研究の目的は、沖縄と本土における平和意識の地域差を明らかにすることである。具体的には、沖縄出身者、本土出身者、そして沖縄から本土に移住した人々を対象に、構造化されたインタビューを実施し、それぞれの平和意識がどのように形成され、どのような特徴を持つのかを比較・検討する。とりわけ、教育経験や家族の語り、地域的事象が個人の平和意識に与える影響を分析することを重視する。そのうえで、地域的背景が平和意識に与える影響や意識の差異がなぜ起こるのかを考察する。

第2章. 沖縄戦について

2.1 沖縄戦の特異性

沖縄戦は、1945年3月末から6月末にかけて沖縄本島を主戦場として行われた、国内唯一の大規模地上戦である。戦闘は本島全域を巻き込み、住民が戦闘の渦中に取り込まれる点で他の戦域と大きく異なっていた。犠牲者は約20万人に及び、その内訳は日本軍兵士約6万6千人、米軍兵士約1万2千500人、そして沖縄県民を中心とする多数の住民であった。特に住民の犠牲は極めて大きく、軍の防衛線構築のための動員や壕での集団死、さらには日本軍による住民殺害といった悲劇も生じた。このように、沖縄戦は「戦闘」と「生活」が重なり合い、住民が戦場そのものに組み込まれた戦争として位置づけられる。

さらに、沖縄戦の特異性は「記憶の継承」という側面にも表れている。戦争体験が地域社会や家庭で語り継がれ続け、学校教育や平和祈念施設を通じて制度的に記録・伝承されてきた。こうした記憶の重層性は、戦争の惨禍を「遠い歴史」ではなく「現在に連なる出来事」として認識させ、沖縄における平和意識の形成に大きな影響を与えている。

2-2 戦後の復興

沖縄戦で焦土と化した沖縄は、戦後長く米軍の施政権下に置かれることとなった。

沖縄住民は戦後直後から生活再建に取り組む一方、土地の接収や基地建設による困難に直面した。生活の基盤を取り戻す過程は決して平坦ではなく、戦争被害の後処理と米軍統治下の構造的制約が重なり、住民は二重の苦難を背負うこととなった。

復興の歩みの中で、戦争の記憶を語り継ぐ活動や平和祈念の取り組みが進められた。1972 年の本土復帰以降、沖縄戦の体験は学校教育に取り入れられ、平和学習として制度化されていった。資料館や慰霊碑の整備、慰霊の日の制定なども、戦争の記憶を社会的に継承する重要な基盤となった。こうした取り組みは、沖縄における「平和意識」を地域社会全体で共有・維持する役割を果たしている。

第 3 章 調査内容

本章では、本研究で実施した調査の対象、方法、質問項目について詳述する。本研究は、沖縄と本土における平和意識の地域差を明らかにすることを目的としており、個人の経験や語りを重視する必要がある。そのため、構造化されたインタビューを用いた。

3-1 調査対象

本研究では、平和意識が形成される背景として「育った地域」と「現在の生活環境」の両方が重要であると考え、以下の三つの対象群を設定した。調査対象者は合計 13 名であり、全員が大学生または社会人である。

対象 1：沖縄育ち・本土在住（男性 2 名、女性 1 名）

第一の対象群は、「沖縄で育ち、現在は本土で生活している者」である。この対象群は、沖縄と本土の両方の生活経験を有しており、二つの地域を比較する視点を持つ点に特徴がある。沖縄における平和教育や地域文化の影響を受けながら成長し、その後本土で生活することで、平和意識がどのように変化・再認識されるのかを明らかにするために設定した。。

対象 2：沖縄育ち・沖縄在住（男性 4 名、女性 1 名）

第二の対象群は、「沖縄で育ち、現在も沖縄に在住している者」である。この対象群は、沖縄戦の記憶や平和の語りが現在の生活と密接に結びついている環境に置かれている。戦争の記憶が日常生活の中でどのように維持され、平和意識に影響を与えているのかを把握するため、本研究において重要な対象群である。

対象 3：本土育ち・本土在住（男性 5 名）

第三の対象群は、「本土で育ち、現在も本土で生活している者」である。本土において育った人々の平和意識を把握し、沖縄出身者との比較対象とすることで、地域差の有無やその特徴を明確にすることを目的として設定した。

このように三つの対象群を設定することで、単なる沖縄と本土の二項対立ではなく、移動経験を含めた多面的な比較が可能となる。

3-2 調査方法

調査方法として、構造化されたインタビューを採用した。
また、インタビューは対面またはオンライン通話を用いて実施し、1名あたりおよそ20～30分の時間を確保した。

3-3 質問項目

インタビューでは、全ての対象者に対して共通の5つの質問を設定した。これらの質問は、平和意識の内容、その形成過程、日常生活との関係を多角的に把握することを目的としている。

1. あなたにとって「平和」とはどのような状態や価値を意味しますか？
2. 子どもの頃、学校教育や地域行事、家族での語りを通して「沖縄戦」や「平和」についてどのように学びましたか？
3. 日常生活の中で「平和」を考えるきっかけとなる出来事や体験はありますか？
4. 自分が育った地域が、あなたの平和意識にどのような影響を与えたと感じますか？
5. 次の世代が平和について考えるために、どのような教育や取り組みが必要だと思いますか？

さらに、共通質問に加えて、対象群ごとに異なる追加質問を設定した。これは、各対象群が持つ生活経験の違いをより深く把握するためである。

対象1（沖縄育ち・本土在住）

「沖縄で育った経験と、本土で生活している経験を比べて、平和に関する考え方に違いを感じますか？具体的なエピソードがあれば教えてください。」

対象2（沖縄育ち・沖縄在住）

「沖縄で育ち、今も沖縄に住む中で、戦争の記憶や平和の語りがどのように生活に関わっていると感じますか？」

対象3（本土育ち・本土在住）

「本土で育つ中で、沖縄戦や戦争の記憶を直接知る機会がありましたか？それはどのような形でしたか？」

第4章 結果

本章では、13名への構造化インタビューから得られた回答をもとに、沖縄と本土における平和意識の特徴を整理する。分析にあたっては、調査対象を、対象1「沖縄育ち・

本土在住」、対象 2「沖縄育ち・沖縄在住」、対象 3「本土育ち・本土在住」の三群に分け、それぞれの回答傾向を比較することで、平和意識の共通点と相違点を明らかにする。

4-1 平和概念の捉え方

まず、「あなたにとって平和とはどのような状態か」という質問に対しては、すべての対象群に共通して、「安心して生活できる状態」「不安や恐怖がないこと」といった回答が多く見られた。このことから、若年層において平和は、戦争が起きていない状態という抽象的概念よりも、日常生活の中で実感される価値として捉えられていることが分かる。しかし、その内容を詳しく見ると、対象群ごとに表現の具体性に差が見られた。

沖縄出身者（対象 1・対象 2）は、「命が守られていること」「家族が無事に過ごせること」「突然日常が壊されないこと」といった、生命や家族に直結した表現を多く用いていた。ある対象者は、「平和とは、昨日と同じように今日が終わることだと思う」と述べており、戦争によって日常が奪われた歴史を背景とした認識がうかがえた。

一方、本土出身者（対象 3）は、「社会が安定していること」「大きな事件や戦争が起きていないこと」など、社会全体の状況を示す抽象的な表現が目立った。これらの回答からは、戦争を自分自身の生活と直接結びつけて捉えるというよりも、社会的な出来事として距離を持って認識している様子が読み取れる。

4-2 子ども時代の平和学習と教育経験

子ども時代にどのように平和や沖縄戦について学んだかという質問では、三群の間に最も顕著な差が見られた。

沖縄出身者（対象 1・対象 2）は、学校教育だけでなく、家庭や地域社会を含めた多層的な学習経験を持っていた。多くの対象者が、小学校から高校にかけて、戦争体験者の講話を聞いた経験や、平和祈念公園、資料館、防空壕跡などを訪れた経験を挙げている。また、「祖父母から戦争の話を聞くことがあった」「親戚の集まりで自然と戦争の話題が出た」といった回答も多く、家庭内での語りが重要な役割を果たしていることが分かる。

特に対象 2（沖縄育ち・沖縄在住）では、「平和学習は特別な授業というより、当たり前のものであった」という回答が複数見られた。慰霊の日を中心とした学校行事や地域行事が、戦争の記憶を日常生活の中に組み込んでいる様子がうかがえる。

一方、本土出身者（対象 3）の回答では、平和学習の中心は広島・長崎の原爆学習であり、沖縄戦については「教科書で少し触れた程度」「名前は知っていたが内容はよく知らなかった」という声が多かった。また、戦争体験者の語りを直接聞いた経験を持つ者はほとんどおらず、戦争の記憶が生活と結びつく機会が限られていることが明らかになった。

4-3 日常生活における平和意識の契機

日常生活の中で平和を意識するきっかけについて尋ねたところ、沖縄出身者と本土出身者の間で明確な違いが見られた。

沖縄出身者（対象 1・対象 2）は、基地の存在や戦跡、慰霊の日など、日常空間の中に平和を意識させる要素が存在していると回答した。例えば、「基地のフェンスを見ると、戦争が終わっていない気がする」「慰霊の日が近づくと自然と平和について考える」といった発言が見られた。

一方、対象 1 の中でも本土に移住した者は、「沖縄にいたときは自然と考えていたが、本土ではほとんど考えなくなった」と述べており、環境の変化によって平和意識が喚起されにくくなる様子が示された。

本土出身者（対象 3）では、「ニュースで戦争の映像を見たとき」「授業で扱われたとき」など、非日常的な出来事をきっかけに平和を考えるという回答が中心であり、日常生活の中で平和を意識する機会は少ないことが分かった。

4-4 出身地域と平和意識の関係

出身地域が平和意識に与える影響については、多くの対象者が地域的背景の重要性を認識していた。

対象 2（沖縄育ち・沖縄在住）は、「戦争の話が身近にあることで、平和を特別なものとしてではなく、守るべき日常として考えるようになった」と述べており、平和意識が生活文化の一部として形成されている様子がうかがえた。

対象 1（沖縄育ち・本土在住）は、本土で生活することで、沖縄で育った経験の特異性を強く意識するようになったと回答している。「慰霊の日が共有されないことに驚いた」「沖縄では当たり前だった話題が、本土ではほとんど出ない」といった声は、地域による記憶の共有度の違いを示している。

対象 3（本土育ち・本土在住）は、「沖縄戦は知識としては知っているが、実感としては遠い」と述べる者が多く、平和意識が間接的な学習に依存していることが明らかになった。

4-5 次世代の平和教育への提案

次世代に必要な教育については、対象者全体で以下の傾向が見られた：

- 現地訪問を重視（特に沖縄出身者）
- 語り部の減少への危機感
- 映像・記録のアーカイブ化
- 沖縄戦だけでなく、ほか地域の戦争も学ぶ必要性
- 体験型・参加型学習の必要性
- SNS を活用した情報発信

特に、沖縄出身者は、「現地で見て感じることでしか分からないことがある」と述べ、体験型学習の必要性を強調していた。一方、本土出身者からは、「そもそも学ぶ機会が少ない」「知るきっかけが欲しい」という声が多く、教育機会の不足が指摘された。

4-6 追加質問から見える地域固有の特徴

対象1（沖縄育ち→本土）への質問と回答の特徴

「沖縄で育った経験と、本土で生活している経験を比べて、平和に関する考え方に違いを感じますか？具体的なエピソードがあれば教えてください。」

- ・ 慰霊の日が“共有されない歴史”であることに大きなギャップ
- ・ 沖縄の祖父母は語るが、本土の祖父母は語らないという経験
- ・ 本土では基地問題が身近な話題として扱われない

このような結果から、沖縄育ちで本土に移住した対象1は、二つの地域を比較する立場から、沖縄の平和意識は生活に根付いているが、本土では個人の関心に委ねられていると感じていることが分かった。

対象2（沖縄育ち→沖縄在住）への質問と回答の特徴

「沖縄で育ち、今も沖縄に住む中で、戦争の記憶や平和の語りがどのように生活に関わっていると感じますか？」

- ・ 語り・行事・文化（琉歌など）を通して生活と記憶が連続
- ・ 記憶が年中行事に組み込まれている
- ・ 戦争の跡地が生活圏に存在

沖縄育ち・沖縄在住の対象2は、「語りや行事が生活の中にあり、意識しなくても戦争を忘れにくい環境にある」と述べており、記憶が制度化されている様子が示された。

対象3（本土育ち→本土在住）への質問と回答の特徴

「本土で育つ中で、沖縄戦や戦争の記憶を直接知る機会がありましたか？それはどのような形でしたか？」

- ・ 沖縄戦を直接知る機会是非常に少ない
- ・ 沖縄戦について知った契機の多くは“沖縄出身者との出会い”
- ・ 学校教育では地域差が強く反映されている

本土育ち・本土在住の対象3は、「沖縄戦を直接知る機会はほとんどなかった」と答える者が多く、沖縄戦についての理解が沖縄出身者との出会いを通じて深まったケースが目立った。

第5章 考察とこれからの展望

5-1 本研究から得られた主な知見

本研究では、沖縄と本土における平和意識の地域差を明らかにすることを目的として、3つの対象群に対する構造化インタビューを実施した。その結果、平和意識の定義そのものには一定の共通性が見られた一方で、その具体性や生活との結びつき方において、明確な地域差が存在することが明らかになった。

すべての対象群に共通して、「平和」とは安心して日常生活を送れる状態であるという認識が示された。この点から、若年層における平和意識は、国家間の安全保障や戦争・紛争といった抽象的な次元よりも、個人の生活世界に基づいた価値として理解されているといえる。しかし、その「安心」や「日常」が何を意味するのかという点については、出身地域によって差が見られた。

沖縄出身者は、平和を「命」や「家族の安全」、「生活が破壊されないこと」といった具体的かつ身体的な経験と結びつけて捉える傾向が強かった。一方、本土出身者は、「社会が安定していること」や「普段通りの生活が続くこと」といった、より抽象的な表現を用いる傾向が見られた。この違いは、戦争と自分自身の生活との距離感の違いを反映していると考えられる。

5-2 平和意識の地域差を生み出す要因

このような平和意識の地域差が生じる要因として、最も重要なのは、戦争の記憶が生活の中にどの程度組み込まれているかという点である。

沖縄では、沖縄戦が国内唯一の大規模地上戦であったという歴史的背景から、戦争の被害が地域社会や家庭の記憶として現在まで強く残されている。慰霊の日をはじめとする年中行事、平和祈念公園や戦跡の存在、さらには基地問題など、戦争の影響は過去の出来事として完結せず、現在の生活とも接続され続けている。このような環境は、戦争を「学ぶ対象」ではなく、「生活の延長線上にある現実」として認識させると考える。

また、沖縄では戦争体験者の語りが家庭や地域社会で共有され、学校教育とも連動している点が特徴的である。家庭・地域・学校が連携することで、戦争の記憶は個人の体験を超え、社会的記憶として継承されている。この構造が、沖縄における平和意識を具体的で切実なものとして形成していると考えられる。

一方、本土では、沖縄戦に関する学習は主に教科書を通じた知識習得にとどまり、地域社会や家庭生活と結びつく機会が限られている。そのため、戦争の記憶は生活空間の外部に位置づけられ、平和意識も抽象化されやすい構造にあるといえる。本土出身者の多くが、沖縄戦について大学進学後や沖縄出身者との交流を通じて初めて具体的に知ったと回答している点は、この構造を端的に示している。

5-3 移動経験がもたらす平和意識の変容

本研究で特に注目すべき点は、沖縄育ちで本土に移住した対象1の回答である。この対象群は、沖縄と本土の両方の生活経験を持つため、平和意識の相対化が顕著に見られた。

対象1の多くは、本土で生活する中で、慰霊の日が共有されないことや、戦争の語りが日常的に行われないことに違和感を覚えたと述べている。この経験は、沖縄で育った際には当然のものとして受け止めていた平和文化や戦争の語りが、特定の社会的環境の中で形成されていたことを再認識させる契機となっている。

このことから、平和意識は個人の内面に固定された価値ではなく、社会的環境によって強化されたり希薄化されたりする可変的なものであるといえる。生活環境の変化が、平和意識を弱める場合もあれば、逆にその重要性を再確認させる場合もあるという点は、本研究の重要な知見である。

5-4 平和教育への示唆と今後の課題

本研究の結果は、現在の日本における平和教育の課題に対しても重要な示唆を与えている。本土では平和教育が制度的には実施されているものの、生活実感と結びつきにくく、知識中心の学習にとどまりがちである。その結果、平和が「学ぶ対象」であり、「自分自身の問題」として捉えにくい状況が生じていると考えられる。

その点で、対象者から多く挙げられた現地訪問や体験型学習は、平和教育を再構築する上で重要である。戦跡や資料館を実際に訪れ、空間としての記憶に触れることは、戦争を抽象的な歴史から具体的な現実へと転換する効果を持つ。また、語り部の高齢化が進む中で、映像や音声による体験記録の保存と活用は、次世代への記憶継承において不可欠である。

さらに、SNSを活用した平和教育の可能性も指摘できる。若年層にとって身近なメディアを通じて戦争の記憶や平和の価値を発信することは、従来の学校教育を補完し、平和について主体的に考える契機を生み出すと考えられる。

最後に、本研究の課題として、調査対象者数が13名と限られている点が挙げられる。今後は対象者の人数や属性を拡大し、世代差や地域差をより詳細に分析する必要がある。また、平和意識が実際の行動や社会参加、政治意識とどのように結びついているのかを検討することも、今後の重要な研究課題である。

以上より、本研究は、沖縄と本土における平和意識の違いを、単なる意識の差ではなく、歴史的経験、教育制度、生活環境の違いによって生じる構造的な差異として示した点に意義があるといえる。

参考文献

(1)本多正尚.杉本善嗣.大中玲奈.中村宏三.村島正浩.藤本昌也.井上哲子.山脇敬一.横町数則.「平和学習に対する意識の地域差 -沖縄と大阪の比較」.琉球大学教育学部紀要.2008

(2)松本 康.「連想語に見る『平和意識』の発達(1)」。社会科教育研究.1989.61 号 p32-47

(3)琉球新報社「沖縄戦って、どんな戦争だったの？」

<https://corp.ryukyushimpo.jp/okinawasen/sensou01>